

## 『箋注和名類聚抄』の箋注部分における俗語、方言についての考察

山 本 智 美

## はじめに

狩谷椽齋の『箋注和名類聚抄』(以下『箋注』と省略)は、平安時代の古辞書『和名類聚抄』の研究書として、高い評価を受けている。これは、『和名類聚抄』の異本を考証し、それに詳細な注を付け加えたものである。その注には、俗語や方言などが収録されており、当時の言葉を知る上でも貴重な資料である。本稿では、その俗語や方言を対象に、椽齋がどのような資料によってそれらの語彙を収集したのかを調査する。これは、『箋注』成立の一端を明らかにするとともに、各資料の享受の一端を知ることにもなる。また、この調査を通じて、俗語・方言の収録にどのような意図があったのかを考察する。

## 一、照合する俗語・方言の取捨基準

調査の方法は、箋注部分から俗語・方言を抽出し、椽齋が使用した資料と照合し、引用の有無を調べる。

〈俗語〉は、「今俗呼」等の書き出しのある語彙とする。これらの語彙は、漢字音で一字一音表記(以下、これを真仮名表記とする)されているものと、通常の漢字表記されているもの、両者の混在するものがある。他資料との照合の際、俗語・方言の正確な読みが必要だが、漢字表記のものの中には読みが揺れが生じるものもある。そのため、漢字表記のものは対象から外し、真仮名表記のもののみを対象とした。

## 例一

霽…(音與)溜同、和名阿末之太利、○…今俗呼「阿末太禮」【下

線は引用者による。以下同じ。【注一】

『箋注』卷一 天地部 二十六表

例二

窮鬼：（師説伊岐須太萬、○…今俗所謂生靈是也、）

『箋注』卷一 天地部 四十二表

例一は真仮名のみを表記であり、例二は通常の漢字表記である。本調査で対象となるのは例一で、例二は対象から外した。また、漢字表記に真仮名が混在するものも、対象から外した。

△方言△は、同じく箋注部分に地方名を伴って記述されている語彙とする。「今」あるいは「今俗」という書き出しはなくても取り上げた。これも、俗語の場合と同様に、真仮名表記のもののみを調査対象とした。他資料との照合の際、方言の場合は、語彙とその地方も併せて考察する。次の例三の場合、伊予の方言で「ユフツツ」として取り出す。

例三

長庚…（此間云、由布都々、○…今俗呼三宵明星、谷川氏士清日、伊豫鄙人、今猶呼三由布都々、）

『箋注』卷一 天地部 十六表

例四

霍亂…（霍亂俗云之利與理久智與理古久夜万比○…今有鄙人謂レ尿爲三波利古久一放屁呼三倍古久一者、）

『箋注』卷二 疾病部 七十表

また、例四の場合、俗語でもなく、特定の地方の方言でもないの、△その他△と分類した。「鄙人」の他、「舟人」などの言葉もこれに分類した。

以上の条件で俗語・方言を取り出した結果、俗語が五一五例、方言が一六六例、その他が七例となった。

## 二、巻毎の俗語・方言の分布

椋斎が箋注部分に記述している俗語・方言を巻毎に集計すると、次の表のようになる。

表一 俗語・方言の分布

巻次	俗語	方言	その他	計
1	35	2	1	38
2	83	6	3	92
3	44	6	3	53
4	55	6	0	61
5	45	1	0	46
6	24	13	0	37
7	31	11	0	42
8	81	84	0	165
9	78	15	0	93
10	39	11	0	50
計	515	155	7	677

巻次によって多少があるのは、部立てによって俗語・方言が生まれやすいものとそうでないものがあるからである。俗語は巻二、八、九で多く、巻八は、特に方言が多い。巻八は龍魚部、龜貝部、虫多部で構成されており、方言が生じやすいためである。巻二は形體部、疾病部、術藝部で構成されており、方言は少ないが、形體部、疾病部での俗語が多い。巻九は稲穀部、菜蔬部、果蔬部で構成されており、これも俗語が生じやすいと考えられる。

方言が偏っている理由として、椋齋が参考資料として本草書を使用していたことが挙げられる。本草書では、植物、昆虫、魚類などの方言を多く収録しており、これらの分野での方言数が多くなつたと考えられる。

### 三、照合する資料について

『箋注』を見ると、例三のように、参考にした資料名やその著者名が度々見られる。ここからも、椋齋が『箋注』を著すにあたって、様々な資料を参考にしていたことがわかる。例三の「谷川氏士清曰」は、谷川士清のことであり、その著書『和訓栞』を引用しているのである。このほかにも、小野蘭山、新井白石らの名前が見られる。ここから、俗語・方言の参考資料として使用していたものを推定し、照合に用いた。

また、椋齋の蔵書の抄目録『求古楼書目』が残っている。そこに、方言辞典『物類称呼』の名が挙がっており、これも参考資料として

扱う。なお、この『求古楼書目』には、「和訓栞」の名も挙がっている。他のものは記載がないが、抄目録であるため、遺漏されたのである。こうして取り上げた椋齋の参考資料【注二】は、以下のものである。

『大和本草』 貝原益軒著 宝永五年（一七〇八）序。

『和漢三才図絵』 寺島良安著 正徳三年（一七一三）刊。

『東雅』 新井白石著 享保二年（一七一七）成立。

『物類称呼』 越谷吾山著 安永四年（一七七五）刊。

『和訓栞』 谷川士清著 安永六年（一七七七）第一編刊。

『本草綱目啓蒙』 小野蘭山著 文化三年（一八〇六）刊。

各資料と箋注部分の俗語・方言と各資料とを照合し、語彙や記述の一致をもとに引用の有無を調べた。中には、複数の資料と一致したため、どの資料によつたのか判別しがたく、保留したものもあった。また、単に語彙が一致したからといって、それがすなわち引用であると即断することはできない。各資料との照合で一致数を出したが、それは引用程度の参考としておく。また、一致数の多寡とともに、『箋注』中に見られる各資料の編著者名の数も引用程度の参考とする。以下、各資料毎に分け、椋齋がこれらの資料をどのように用いていたのかを考察する。

## 四、各資料との照合

## 1 『大和本草』との照合

『大和本草』は、今回扱う資料の中では最も成立が古く、宝永五年（一七〇八）、著者は貝原益軒である。『大和本草』は、当時隆盛を見せ始めていた博物学を大きく前進させたものであり、後の小野蘭山著の『本草綱目啓蒙』にも多大な影響を与えている。核斎が『大和本草』を参考にしていたことは、次の記述からわかる。

## 例六

温菘…（音終、古保禰、○…貝原氏曰、西國有古於保禰、小於波多野大根、〔傍点は引用者による。以下同じ〕

## 例七

野蘿蔔…今案西土ノ小大根相州ノ波多野大根是ナリ 根細長波多野大根ハ小オホネヨリ大ナリ 別物一類ナリ…

『大和本草』巻五 菜蔬類

『大和本草』の語彙で、調査の対象としたのは、見出し語の振り仮名、本文中にカタカナで書かれている俗語及び方言、本文中に振り仮名を打たれている俗語及び方言の三種類である。

『箋注』と、これらの語を照合した結果、七例の一致が見られた。

このうち方言は二例ある。この一致数は、今回の参考資料の中で最も少ないものである。また、箋注部分に益軒の名があり、明らかに『大和本草』からの引用であるとわかるのは、例六のみである。なお、この「コオホネ」については、他に『和訓栞』にも記述がある。

## 例八

こおほね 和名抄に温菘を訓せり菜蔬に同じ

『和訓栞』上

核斎は『和訓栞』も参考資料としていたが、これら三者の記述を比較すると、この項では『和訓栞』ではなく『大和本草』の記述を参考していると判断できる。

『大和本草』では、同じ本草書である『本草綱目啓蒙』に比べて方言の収録数が少ないが、『箋注』との一致例では、もう一例方言の引用がある。

## 例九

檳榔…（賓郎二音、…○本草和名云、和名阿知末佐、…齋宮式檳榔葉、及檳榔毛車、皆謂蒲葵、今俗亦呼蒲葵爲毘良宇、對馬呼毘波）

『箋注』巻十 草木部 百十三裏

## 例十

蒲葵〔和名〕ピロウ ビレウ…今案二蒲葵其葉棕櫚葉ニ似テヒ

ロシシ：対馬ニテハゴハト云

『大和本草』卷十二 木之下 雜木類

この「ゴハ」は、『本草綱目啓蒙』を含む他の参考資料には掲載されておらず、椽齋が『大和本草』から引用したものと思われる。参考資料との一致を見る際に、記述部分の一致も参考としたが、語彙の一致例で、『大和本草』の記述も引用されていたのは、二例だけであった。うち一例を挙げるが、『箋注』では、『大和本草』の記述をほとんどそのまま引用している。

例十一

斷木…(音列、天良豆豆岐、○…和名啄木皆訓寺豆支、今俗呼  
岐都都岐、…舌長於味、其端有針刺啄)

『箋注』卷七 羽族部 二十表

例十二

啄木和名キツツキ(テラツ、キ) …舌長ク サキニ針アリ

『大和本草』卷十五 小鳥

以上のように、椽齋は『大和本草』を参考資料としていたのだが、俗語・方言の一致は少ない。その理由として、『大和本草』の成立が『箋注』の起稿より百年以上前のものであることが考えられる。『大和本草』の記述が正確で、信用に足るものであっても、その称呼については変化していることもありうる。『箋注』における俗語

とは、平安時代の称呼に対する、椽齋の時代の称呼である。俗語は「今俗呼」などの書き出して記述されている。この「今俗呼」は、「現在の称呼では」という意味である。そのため、古い資料の呼称の引用を控えたのではないだろうか。

また、方言の一致が少ない理由として、『大和本草』の後に、『本草綱目啓蒙』が刊行されたことも挙げられる。『本草綱目啓蒙』は、『大和本草』の内容を取り入れて、さらに詳しい記述を加えている。方言の収集にも力を注いでおり、その語彙量は『大和本草』と比べてはるかに多い。これらの理由から、『大和本草』からの語彙の引用が少なくなったと考えられる。

しかし、『大和本草』には、『本草綱目啓蒙』では収録されていない語彙や記述がある。例九ををはじめ、『箋注』と『大和本草』との一致例がそうであり、椽齋はそれらを『箋注』に引用しているのである。つまり、『大和本草』は『本草綱目啓蒙』の補足的資料として使用されていたと言えよう。このことは、『箋注』中に挙げられている益軒と蘭山の名の数でも知ることができる。蘭山は五十二箇所、益軒は十五箇所、名が挙げられており、引用された語彙数だけでなく、その記述の引用でも、蘭山の方が多いためである。

2 『和漢三才図絵』との照合

『和漢三才図絵』は、大阪在住の医者、寺島良安が著した絵入りの百科事典である。その記述は、初めに挿し絵があり、そこに見出

し語、和名、俗語が書かれている。そのあとに、本文が続く。見出し語の脇に、振り仮名のあることが多い。方言はほとんどない。

『和漢三才図絵』は、『求古楼書目』に記載がないが、『箋注』中に良安の名があることから、参考資料であったことがわかる。

## 例十三

罇…(音博、漢語抄云、佐比都恵、○…寺島氏曰、今俗天平乃久波、即此)

『箋注』巻五 調度部 七十五裏

## 例十四

罇…△按罇ハ小鋏形チ微タル斬鋏ト者是カ乎

『和漢三才図絵』巻三十五 農具類 四

調査の対象は、見出し語の振り仮名、俗語、本文中の振り仮名のついている語とした。『和漢三才図絵』の俗語は、真仮名で書かれているが、一致した例でもその文字遣いが異なる場合がある。

## 例十五

鶺鴒…(帝肩二音、漢語抄云、能勢、○…寺島氏曰、豆布利、形色似鶺鴒、有白彪、今俗譌呼豆俱利)

『箋注』巻七 羽族部 七裏

## 例十六

鶺鴒子…(和名都布利、俗云都俱利)△按鶺鴒子ハ鶺鴒之属也形色

似鶺鴒而小ク有白彪

『和漢三才図絵』巻四十四 山禽類 十五

『箋注』では、「寺島氏曰、豆布利」となっているが、『和漢三才図絵』では「都布利」と表記されている。良安の名があることから、『和漢三才図絵』を引用していることは確かだが、文字遣いまでは参考にしていない。文字遣いを変えたことには、何らかの意図があったのだろうか。『箋注』における真仮名の文字遣いについては、また別の機会で論じてみたい。

例十五のように、引用されていることが明らかでも、仮名遣いが一致していない例があるが、両者の照合は、文字遣いの一致も考慮に入れて行った。その結果、四十一例の一致が見られたが、この中に方言の一致はなかった。方言の一致がなかったことは、『和漢三才図絵』には方言があまり収録されていないことに加えて、『和訓栞』や『本草綱目啓蒙』など、方言を多く収録する資料が他にあったからであろう。

校齋は、参考資料から単に語彙だけを引用するのではなく、語源説や解説も併せて引用することがある。『和漢三才図絵』の場合も、良安の説を引用している箇所がある。

## 例十七

木瓜…(音茂、本草木瓜、毛介、○…按毛介、即木瓜之音轉、今俗呼菩計)

## 例十八

木瓜：(和名毛介 木瓜之転音也) 再転シテ今称ト保介)

『箋注』卷十 草木部 百表  
『和漢三才図絵』卷八十七 山果類 七

両者の記述にはほとんど差違がないが、「ボケ」の表記が違っている。椽斎の文字遣いについては別稿に譲るが、ボの表記に「保」ではなく「菩」を使ったのは、濁音表記を意識してのことであろう。椽斎が、真仮名の表記において濁音を意識していたことは、次の例にも表れている。

## 例十九

犁：(音黎、加良須岐、○：今俗或呼閉加 閉字濁呼)

『箋注』第五 調度具 七十三表

『和漢三才図絵』との一致数は四十一例で、これは、本調査で使  
用した参考資料中の三番目の数になるが、椽斎は『和漢三才図絵』  
はあまり重要視していなかったのではないかと思われる。なぜなら、  
『箋注』中に良安の名は五箇所にしか見られないからである。『和  
漢三才図絵』と同じ百科事典ではないが、これと同じく、語彙を総  
合的に収録しているものに『和訓栞』がある。『和訓栞』との一致  
数は五十五例であり、一致数にそれほどの差はない。しかし、その  
著者谷川士清の名は百十箇所に見られる。椽斎が参考資料の編著者

名を明記するのは、その人の語源説や語義説などを引用するときが多い。従って、良安の名がわずかしか見られないということとは、『和漢三才図絵』の記述をあまり引用していないということになる。実際に、『和漢三才図絵』との語彙の一致例の中で、記述部分とも一致した数は八例に過ぎない。この数は、決して多いとは言えない。こうしたことから、『和漢三才図絵』は、他の資料の補足的な資料として用いられていたと考えられる。

## 3 『東雅』との照合

『東雅』は新井白石の著書で、享保二年(一七一七)に成立した語源研究書である。語源の他にも、多くの俗語を収録している。

記述の内容は、見出し語、和訓、語義、語源を記し、改行して俗語とそれに関する記述が続く。和訓、俗語はカタカナで書かれている。方言も取り上げられているが、数は少ない。照合の対象にしたのは、この俗語と方言、本文中に振り仮名のある語とした。また、一致しているかどうかの判断では、『東雅』の語源説も引用されているかも考慮に入れた。その結果、二十二例の一致が見られた。このうち方言の一致は二例見られた。まず方言の一致例を挙げておく。

## 例二十

反轉：(久流閉積、揚氏漢語抄説同、○：今俗呼二万比波)者、蓋是、新井氏曰、今東國猶呼二久流閉積)

例二十一 『箋注』卷六 調度部 六十裏

反轉 クルベキ：此器をカセワともいひ。マヒバともいふなり。方言の同じからぬにや。即今、東國には。クルベキといふなり。絲をクリてへぬるものなれば。クルヘキといふにや。

例二十二 『東雅』卷九 器用

繆車：(蘇遭反、：訓久流、漢語抄云、繆車、於保質、○：新井氏曰、東國俗呼加奈和久)

例二十三 『箋注』卷六 調度部 六十一表

繰車 ヲホガ、和名抄に繰読みてクルといふ。：即今、東方之俗はカナワクといふなり。ヲボカの義不詳。

『東雅』卷九 器用

方言の一致例はこれだけだが、この二語は、他の資料には見られず、『東雅』だけに収録されているものである。この二例もそうだが、こうして一致したものには、白石の名を挙げて記述を引用したものが多し。二十二例中十二例に白石の名があり、その語源説を引用している。『箋注』全体では、八十三箇所に白石の名が挙がつている。前述のように、椽齋が人名を記すのは、その人の説を引用した場合が多く、単に語彙だけを引用するときには記さない傾向がある。前述の良安が五箇所であったことと比較しても、いかに白石の

説を信用していたのかが伺える。例二十、二十二ともに語彙だけの引用であったが、白石の語源説を引用している例もある。

例二十四

泥：(奴低反、和名比知利古、一云古比知、○：新井氏曰、土子之義、利助語、古與砂訓須奈古之古同、萬葉集、水土手訓古比知、又見後撰集、今俗呼土呂)

例二十五 『箋注』卷一 天地部 六十表

泥 ヒチリコ またコヒチともいふと見えたり。ヒチといふは土也。リと云ふは語助にて。コというは。スナゴなどいふコの詞に同じき也。俗にはドロといふ。其義未詳。

『東雅』卷一 地輿

ここでは、白石の語源説を引用しているが、「コは砂をスナゴと訓ずるのと同じ」の部分と、「今俗にドロと呼ぶ」の間にある。「万葉集に、水土手をコヒチと訓じ、又後撰集にも見える」の部分は椽齋による補足である。白石の語源説を取り入れるだけでなく、時にはそれに自ら補足を付け加えることもある。

例二十六

糠：(音康、奴賀、○：新井氏曰、奴賀、脱也、蓋脱皮之省) 『箋注』卷九 稻穀部 十九表



## 例二十七

穀 モミ…ヌカとはヌク也 又ヌクとは脱也。其実の脱けしをいふ也。

『東雅』卷十三 穀蔬

「ヌカ」が「脱」を語源とすることは『東雅』の記述をそのまま引用しているが、それが「脱皮之省」であると補足している。椋斎は参考資料を盲目的に引用しているのではなく、適宜自説を取り入れているのである。

『和訓栞』は、語源説も取り入れており、また椋斎もこれを度々引用している。『和訓栞』は、『東雅』より『箋注』との語彙の一致数が多いが、その『和訓栞』ではなく『東雅』の語源説を引用しているものもある。例二十四では、『東雅』の説を引用し、コはスナゴのコと同じ、としていた。しかし、『和訓栞』にはコヒチの語義説として、「ヒチともいへハコハ濃なるへし」(巻上)とあるが、これは取り上げていない。恐らく、椋斎は『和訓栞』の説も知っていたであろう。両者の説を比較した結果、『東雅』の説を取り入れたと思われる。このように椋斎は、『東雅』を俗語や方言の資料としてより、主に『東雅』本来の、語源説の資料として使用していたのである。

## 4 『物類称呼』との照合

『物類称呼』は、安永四年(一七七五)に刊行された方言辞典である。『物類称呼』の題簽には、『諸国方言 物類称呼』とあり、全国の方言が収録されており、当時の方言を知る上で、貴重な資料である。

著者の越谷吾山の名は箋注部分にはないが、『物類称呼』は『求古楼書目』に記載されている。解説は簡潔に割り注で書かれているが、これらは『箋注』に引用されてはいない。一致したのは方言だけであり、その一致数は十三例であった。『物類称呼』の収録語数から考えて、この数は少ない。また、吾山の名が箋注部分に見られないことも併せると、『物類称呼』を資料として重視していなかったと考えられる。

この理由として、『物類称呼』と『本草綱目啓蒙』『和訓栞』との関連が挙げられる。『物類称呼』と『本草綱目啓蒙』とは、『本草綱目啓蒙』が『物類称呼』に補訂を加えたものであるという説がある。【注三】また一方で、『本草綱目啓蒙』では、『物類称呼』は参考資料としてほとんど利用されていない、という説もある。【注四】『物類称呼』と『本草綱目啓蒙』との方言の一致が見られるのは事実であり、『本草綱目啓蒙』の方が方言数が上回っているのも事実である。

また、『物類称呼』と『和訓栞』との間でも、『和訓栞』が『物類称呼』を参考資料にしているという説【注五】、『物類称呼』が『和訓栞』を参考資料にしているという説【注六】がある。今回の考察では『箋注』を間において照合しているので、各説については言及

を避けたい。いずれにせよ、椋斎ほど各資料に精通していれば、この三者の関連には気づいていたであろう。そこで、俗語資料としては『和訓栞』を優先し、方言資料としては『本草綱目啓蒙』『物類称呼』を優先していたのではないだろうか。

方言資料として、『和訓栞』より『物類称呼』を優先していたことは、次の例で知られる。

## 例二十八

綜…(蘇統反、閉、○…按今、関西俗呼「加左利」、関東俗呼「加計以登」、)

## 例二十九

かざり(椋みちをわくる糸也)○関西にて○かざり 武州にて○かけいと 紀州にて○あそび 下総にて○あやいと 西国にて○あぜいと、云

## 例三十

かざり 椋みちをわくる機具也 武州にかけ糸 下総にあや糸 西国にあぜ糸 紀州にあそびといへり

『和訓栞』後編

「カザリ」は『和訓栞』では方言ではなく、見出し語となっているが、『物類称呼』では関西の方言となっている。そして、『箋注』

では『物類称呼』と同じく、関西の方言としている。『和訓栞』との方言の一致がわずかに五例に留まっていることから、椋斎が『和訓栞』を方言資料としては扱っていないことがわかる。このように、椋斎は互いに関連のある『物類称呼』『和訓栞』『本草綱目啓蒙』を、それぞれ目的にあわせて使い分けていたのである。

なお、『箋注』では、『物類称呼』で武州となっている地名を関東に書き換えている。このような地名の書き換えは他の例にも見られる。武州を関東に書き換えたのは、関西と対比させるためであろう。また、『物類称呼』の方言のうち、二語のみを引用し、他の語は省略している。こうした方言の取捨は、他の資料との間でも見られる。後述する『本草綱目啓蒙』との間でも、方言の省略は行われている。この方言の取捨選択については、方言の収録の意図と関連があるので後述したい。

## 5 『和訓栞』との照合

谷川士清著『和訓栞』は、五十音配列を採用し、雅語、俗語・方言などを広く収集した国語辞典である。『箋注』中にも百を超える士清の名があり、参考資料として重要視していたことを伺わせる。両者の俗語の一致は五十例、方言の一致は五例であった。

この一致数は、『本草綱目啓蒙』に次ぐ数であるが、方言の一致数は少ない。これは、前述のように方言資料として『和訓栞』を重視していなかったためである。

## 例三十一

鋸：（音據、能保木利、○…蓋登截之義、今俗呼能古伎利）

〔箋注〕卷五 調度部 八十七表

## 例三十二

のこぎり 鋸をいふのほぎりの轉なり…西國にてのこといひ東國にてのこずりといへりのほせきりなり

〔和訓栞〕中

ここでは、『和訓栞』の方言はとらず、「のほせきりなり」という語源説のみを取り上げている。また、例二十八のように、『和訓栞』では方言としていない語を、他の資料によって方言とした例もある。前述のように、方言の引用では、『和訓栞』より『物類称呼』の方を重視し、さらに『物類称呼』より『本草綱目啓蒙』の方を重視する傾向がある。椋齋は『和訓栞』を方言資料としてより、語義や語源説の資料として扱っていたのである。

## 例三十三

鴨…（…○按鶯家養者、今俗呼阿比呂、蓋足広之義、）

〔箋注〕卷七 羽族部 三十四表

## 例三十四

あひろ 鶯をよめり 足広之義也 あひるともいへり

〔和訓栞〕後編

これは、『和訓栞』から俗語とその語義を引用したものが、俗語や方言だけでなく、『和名抄』の和訓の語義も、『和訓栞』から引用しているものもある。

## 例三十五

縑…（所交反、又音消、加止利、○…谷川氏曰、蓋堅織之義）

〔箋注〕卷三 布帛部 九十三表

この他にも、百箇所以上に士清の名を挙げて語義説や語源説を引用している。椋齋が『和訓栞』をこれほど重視していた理由の一つとして、『和訓栞』が見出し語に『和名抄』の和訓を多く用いていることが挙げられる。そしてその見出し語について、語義や語源、現在の称呼、方言などを記述している。『箋注』は『和名抄』の注釈書であるから、『和訓栞』のこうした記述は、実に利用価値の高いものであったに違いない。そのため、『箋注』執筆の際、『和訓栞』を常に横に置き、参考としていたのである。

## 6 『本草綱目啓蒙』との照合

続いて、『本草綱目啓蒙』との照合を行う。この本草書は、小野蘭山の著作で、その本草学の集大成とも言うべき大著である。この書の特徴は、詳細な解説とともに、多数の方言を収録していること

である。全国の方言を収録し、約一万語に及ぶ。当時の方言資料として貴重な資料である。極斎も参考資料として利用していることは、箋注部分に度々蘭山の名が見られることでもわかる。

例三十六

鮎…(音小、今案俗云氷魚是也、…○…小野氏曰、筑前謂之之呂伊乎、肥前謂之之良伊乎、出雲謂之伊左々又伊左々比乎、伊勢謂之比與與、又之良比與與、)

例三十七

鱸殘魚…一種シロイヲ(筑前)一名シライオ(肥前)イサ、(雲州同名アリ)イサ、ビヲ(同上)ヒヨゴ(勢州)シラヒヨゴ

『本草綱目啓蒙』卷四十二 二十九裏

両者を照合した結果、俗語は六十例、方言は八十九例の一致があった。一致数が最も多かったのは第八巻であった。この巻は、龍魚部、龜貝部、虫多部で構成されており、方言が生じやすい内容であり、また『本草綱目啓蒙』の内容とも合致するものでもある。この第八巻では、『箋注』の俗語・方言の六割以上が『本草綱目啓蒙』と一致している。この第八巻には、八十九例の一致があるが、蘭山の名が挙がっているのは先の例三十六と次の二例だけである。

例三十八

鱸魚…(音天、无奈岐、○…小野蘭山曰、鱸魚、紀伊謂之宇都菩、伊豆謂之宇美具治奈波、安房謂之奈万太、其宇奈岐、以鰻鱺魚、充之爲之允)

例三十九

鱸魚ウツボ(紀州)ウミグチナハ(豆州)熱海ナマダ(房州)

『本草綱目啓蒙』卷四十四 四十一表

例三十六、三十八以外では、蘭山の名は挙がっていないが、その内容の一致は著しく、明らかに『本草綱目啓蒙』からの引用とわかる。蘭山の名が見られないのは、それが語彙のみの引用だからである。極斎は、各氏の説を引用する際にはその名を挙げ、単に語彙を引用する際には名を省く傾向がある。蘭山の名は『箋注』全体では五十二箇所に見られ、決して少なくはない。『本草綱目啓蒙』の説明部分に引用する際には名を挙げてあるのである。

例四十

鮎…(音免、辨色立成云、鮎邇倍、一云久知、○…小野氏曰、二三寸名伊之毛知)

例四十一

石首魚…小ニテ二三寸ナルヲイシモチ(同名アリ)ト云

『本草綱目啓蒙』卷四十四 十表

『箋注』卷八 龍魚部 二十五表

『箋注』卷八 龍魚部 十三表

『本草綱目啓蒙』の方言は多く引用されているが、『本草綱目啓蒙』では方言となっているものを、地名を書かずに俗語と同じ扱いをしているものがある。

例四十二

蠶娘…(當餉二音、以保无之利、○…今俗呼<sub>二</sub>加万幾利<sub>一</sub>、<sub>二</sub>相模<sub>一</sub>謂<sub>二</sub>之以保之利<sub>一</sub>、或曰<sub>二</sub>以保久比<sub>一</sub>、<sub>二</sub>陸奥<sub>一</sub>謂<sub>二</sub>之以保佐之<sub>一</sub>、或曰<sub>二</sub>以保无之<sub>一</sub>)

例四十三

蠶娘イボムシリ(和名鈔) カマキリ(京) イボムシ(奥州) イボサシ(同上) イボジリ(相州) イボクヒ(同上) カマカケ(雲州) カマキリテウライ(肥前) カワミン(信州) カマギツテウ(江戸) ハイトリムシ(同上)

『箋注』卷八 虫多部 六十表

『本草綱目啓蒙』卷三十五 十三裏

『本草綱目啓蒙』では「カマキリ」が京の方言とされているが、椋齋は地名を省略し、俗語として記述している。この「カマキリ」は、他資料では見出し語となっている。

例四十四

蠶娘

例四十五

蠶娘 かまきり(一名いほじり)

『大和本草』卷十四 陸蟲部

例四十六

いほむしり 和名抄、本草 今かまきりといふ

『物類称呼』卷二

『和訓栞』上

椋齋は、「カマキリ」が他資料では見出し語となっていることから、京の方言ではなく俗語としたのである。信用のおける資料であっても、その記述の引用に際して、他資料と常に照合し、適切な記述を行っている。いかに各資料に精通し、より正確な記述を心がけていたかを知ることができる。

五、方言収録の意図

椋齋は、『箋注』の記述になぜ方言を取り入れたのだろうか。様々な資料から方言を引用しているが、それらの資料に記載されている方言を全て引用しているのではない。

例四十七

彌猴桃 …(之良久知、一云古久波、○…今陸奥南部亦呼<sub>二</sub>古久波<sub>一</sub>、呼<sub>二</sub>之良久知<sub>一</sub>、<sub>二</sub>紀伊<sub>一</sub>呼<sub>二</sub>之良久知<sub>一</sub>、又呼<sub>二</sub>古久波<sub>一</sub>、<sub>二</sub>薩

摩呼「菘豆加字」、即古久波之轉、

例四十八

『箋注』卷九 果蓏部 五十九表  
 彌猴桃 シラクチ (和名抄) 紀州、奥州、コクハ (紀州) コク  
 ヲウ (同上) コクハ (南部) ヤマナシ ヤブナシ (濃州) チン  
 ピラリ (土州) リンロク (同上) ナシカヅラ (薩州) ゴツカウ  
 (同上) カナカヅラ (藝州) ヤモリコブノコ (阿州) ニキヤウ  
 (羽州)

『本草綱目啓蒙』卷二十九 六表

ここでは、『本草綱目啓蒙』から方言を引用しているが、その全てを引用しているのではない。「シラクチ」「コクハ」「ゴツカウ」の三語をとり、後は引用していない。ここで注目したいのは、方言の引用の後の「即古久波之轉、」との記述である。これは薩摩の「ゴツカウ」が「コクハ」の転訛である、との意である。これにより、「和名抄」の和名「古久波」が方言に残っていることを示そうとしたのである。『和名抄』の他にも、『新撰字鏡』『万葉集』等の語彙が方言に残存している場合にその方言を引用している。

例四十九

菘零…(加太美、○…今西俗呼伊加岐、甲斐信濃美濃俗呼伊奢留、伊奢留之名、見新撰字鏡、東俗呼邪留、即伊奢留之省、)

例五十

鶴…(多加倍、○…万葉集所謂阿治、即是越後或謂之阿治) 『箋注』卷七 羽族部 三十五表

もつとも、全ての方言が古語の残存というわけではない。例九のゴハは古語の残存ではない。しかし、多くの方言が古語の残存を示すために収録されているのである。

また、『和名抄』の見出し語の説明のために方言が用いられることもある。

例五十一

蟛蜞…(今俗呼土呂雅爾、米都夫禮賀爾、米也美賀爾、久曾賀邇(者是也、)

『箋注』卷八 龜貝部 五十二裏

例五十二

蟹カニ…(今俗呼ハドロガニ、メツブレガニ(勢州)メヤミガニ(同上)クソガニ(備前)ペンツ(予州)

『本草綱目啓蒙』卷四十一 十三裏

蘭山の名はないが、明らかに『本草綱目啓蒙』からの引用である。しかし、全ての地名が省略されており、また最後にある方言「ペンツ」が引用されていない。この蟹については、『和名抄』では和名

が記載されておらず、「ドロガニ」以下の語彙が、この蟹の特徴を表しているため、引用したのではないかと思われる。「ペンツ」ではどのような蟹なのか想像もつかないために、削除されたのであろう。また、「メツブレガニ」以下の方言は古語の残存ではない。従って、それらは方言として取り上げる必要がなかったのである。

以上のように、方言は古語の残存を示すために用いられていた。但しこれは京、江戸を除く地方の方言である。京、江戸、関西、関東、西、東といった地名で挙げられている方言はこの限りではない。掖斎のいう「今俗」とは、平安時代の古語に対する江戸時代語を指す。平安時代と江戸時代では称呼が大きく変わっている場合があり、今ではこう呼んでいる、といった意味である。京と江戸の方言もこれに相当し、当時の京での称呼、江戸での称呼を挙げ、古語の残存でなくとも取り上げている。

## 例五十四

紙老鷗…(…○今俗登毗太古即是、又按、関東呼太古者、関西謂之以加)

『箋注』卷一 術藝部 百九表

## 例五十五

辱…(…和名由止利、…○…今西俗呼阿加久利、東俗呼須都保无者辱是也)

『箋注』卷三 舟車部 六十七裏

次の例は、掖斎の方言の引用基準をよりよく表している。京、江戸の方言は古語の残存でなくとも取り上げ、その他の方言は古語の残存のみを引用している。やや長いが、参考とした『本草綱目啓蒙』の記述と併せて挙げておきたい。

## 例五十六

鱸…(音容、知々加布利、○…今俗呼加自加、京俗呼伊之毛知、近江彦根謂之知々无古、石部驛曰知无古、或曰登知无古、阿波曰知々古宇、一種相似而小、背黑色腹油色無鱗者、杜父魚之淡黄黑色有黒斑細鱗異、京俗呼不具利久良比、近江石部謂之知々无加不利、又謂登知无加不利、是知知加不利之轉譌也、江戸俗呼太古波世者又是類也)

『箋注』卷八 龍魚部 二十六表

## 例五十七

杜父魚 カジカ(古歌 仙臺カハカジカ(仙臺イシモチ(京)カハラコゼ(伏見)ゴロモチ(同上)ウタウタヒ(淀)子マル(嵯峨)子マル(共同上)同上)ウシヌスピト(播州)ステッコ(同上)ドウマン(江州)チンコ(石部)トチンコ(同上)チ、ンコ(彦根)子ンカボ(駒井村)ボンノコ ムコ ドボ(共同上)トホ(備前)ドウボウ(同上)ドンボウ(筑前)ドンボ(同上)ドボウズ(備前 作州)アブラハゼ(豫州 西條)クチナハドンコ(同上)同上)カコブツ(越前 福井)イシビシ(敦賀)イシビス(同上)テンシヨ(同上)クロテンジャウ(共

同上 同上) グズ(越中 同名アリ) ドンゴロ(筑波) ドンク  
 ウ ドンコ(共同上同名アリ) ドンコツ(勢州 龜山) ドゴズ  
 ゴ(同上) ダンギボウ(共同上 桑名) ドンゴウ(肥前) ドン  
 コウ(防州) ゴッポ ホンシキシヤ サムラヒ(共同上) ゴン  
 パ(雲州) カハギス(加州) チ、コウ(阿州) ゴモ(薩州) ゴ  
 モゾウ(同上) ベト(佐州) ベトカチ(同上) アカゴウ(土州)  
 アナゴウ(同上) アナハゼ(日州) キハチ イカリイヲ シマ  
 ハゼ: 古歌ニ詠ズル カジカ即此物ナリト云一説アリ 杜父魚  
 ノ一種相似テ小ク背ハ黒色腹ハ油色ニテ鱗ナキモノヲ フグリ  
 クラヒ(宍)と云フ: 大和本草ニウロ、コト云フ ヲロ、コ(同  
 上) ドンツコ(豫州) ゴロッパ(勢州 山田) ドロボハゼ(桑  
 名) クロボウズ(龜山) クロンボ(共同上 同上) タボハゼ(江  
 戸) エッタ(江州) 石部) トチンカブリ(同上) チ、ンカブリ  
 (同上) アブラ魚(共江州 山田) ヤマドンコツ(防州)

『本草綱目啓蒙』卷四十二 裏

『本草綱目啓蒙』では、六十七語の方言が挙げられているが、こ  
 のうち八語の方言を引用している。京の「イシモチ」、江戸の「ダ  
 ボハゼ」以外は古語の「チチカフリ」の転訛と思われるもののみを  
 引用している。このように、様々な資料を駆使して、『和名抄』所  
 収の古語の注釈を行っているのである。いかに参考資料に豊富な方  
 言があっても、あくまでも『和名抄』の注釈書であることに忠実で  
 あるうとしていたのである。

注一

引用は『箋注和名類聚抄』(京都大学国語国文学研究室編  
 臨川書店刊)を使用した。( )内は割り注部分。○の前は

『和名抄』の記述、その後は箋注の記述である。以下同じ。

注二

使用した各資料は次のものである。

『大和本草』有明書房刊 全二冊

『和漢三才図絵』日本随筆大成刊行會刊 日本随筆大成

別巻 全二冊

『東雅』吉川半七刊 新井白石全集 第四卷

『物類称呼』八坂書房刊 生活の古典双書 第十七卷

『和訓栞』名著刊行會刊 全四冊

『本草綱目啓蒙』早稲田大学出版部刊 全一卷

岩波文庫『物類称呼』解説(東条操氏) 百八十九ページ。

『本草綱目啓蒙』解説(杉本つとむ氏) 八百七ページ下。

岩波文庫『物類称呼』解説(東条操氏) 百八十九ページ。

『物類称呼』解説(杉本つとむ氏) 百九十三ページ。

なお、杉本氏は、「引用者注『和訓栞』の」流布の状況につ

いては明言できないが、何らかの形で書写されたり、回読さ

れたのではあるまいか。」と述べておられる。掖齋は、『和

訓栞』の写本を所有しており、刊行に先立ち、写本が行われ

ていたことは十分考えられる。